

# 荏原、ロケットに技術力生かす

## 燃料用ポンプ、新興と開発



浅見 正男社長



インターステラテクノロジズが2023年度の打ち上げを目指す「ZERO」への部品搭載を目指す（同社提供のイメージ）

### この人に聞く

「ロケットのターボポンプは高速で回転して高い圧力がかかるため、ロケットの中でも最も開発が難しい部品の一つと言われている。だが我々なら、これまでの経験や技術力を応用して、開発ができると考えた」

——具体的にはどのように取り組みを進めますか。

ポンプ大手の荏原がロケット部品開発への参入を決めた。エンジンに燃料を送り込むためのターボポンプの開発を進める。ロケットは燃料に液体水素を使うことが多く、水素ポンプで培った技術力を生かせるかと判断した。新たな事業として育成したいと意気込む浅見正男社長に、航空宇宙分野への進出を決めた背景や今後の展望を聞いた。

——航空宇宙の分野に進出しようと決めたきっかけは。

「社内で開催した新規事業のアイデアコンペティションで、あるチームがロケット開発をしたいと提案したことがきっかけだ。2020年6月に新事業の立ち上げを目指した社内公募『E-Start 2020』を実施した。120件の募集があり、最終審査まで進んで入賞した案件の中に、ポンプに関する技術力を生かしてロケット開発に携わりたいとの提案があった」

「まずは（ロケット開発スタートアップの）インターステラテクノロジズ（IST、北海道大樹町）と共同で開発を進めていく。同社が23年度の打ち上げを目指している小型ロケット「ZERO」に搭載する予定だ。ZEROは超小型人工衛星を搭載できるロケットだ」

「ターボポンプの開発に携わるメンバーの5人のうち2人は、ISTと共同で開発を進めている室蘭工業大学に常駐させている。メンバーには20年に入社したばかりで、ロケット開発に携わりたくて荏原に入社した社員もいる」

——航空宇宙分野に進出するメリットは。

「まず、民間ロケットは今後成長して市場が拡大する分野だと見ている。ZEROへの搭載を足がかりに、今後も取り組みを拡大する考えだ」

また、ロケット部品の参入は、我々が21年から本格的に始めた水素関連事業プロジェクトの一環と位置づけている。ZEROではメタンを主原料とする液化天然ガス（LNG）を燃料に使うが、一般的にロケットでは燃料に液体水素を使うことが多く、関連性が高いためだ」

——水素関連ビジネスの展望をどう描いていますか。

「もともと荏原は水素用のポンプを手掛けるなど、水素関連での知見や経験はあった。水素は脱炭素の追い風を受けて新たな燃料として需要拡大が見込まれている。こうした動きに対応し、我々も事業展開を強化していくために『水素関連事業プロジェクト』を立ち上げた」

「水素関連事業プロジェクトは将来的に、ポンプを扱う『ポンプ・送風機・システム事業』や半導体製造装置などを手がける『精密・電子事業』などのように、一つの大きな事業にまで拡大するつもりだ。事業化が実現すれば、精密・電子事業以来35年ぶりとなる。今では売り上げの30%を占める精密・電子事業のよりに大きく成長させたい」

（聞き手は越智小夏）